類義の熟字「比年」「頃年」「年来」について

――中世真名本の用字の背景に関する一考察――

橋村勝明

目次

一、はじめに
二、「比年」「頃年」「年来」の出現状況について
　1漢字文
　2漢字片仮名交り文
　3漢字平仮名交り文
三、中世往来物・真名本における「比年」「頃年」「年来」
　1中世往来物における「比年」「頃年」「年来」
　2中世真名本における「比年」「頃年」「年来」
四、おわりに

一、はじめに

中世真名本の用字と訓読とについて、これまで主として助字を検討の対象として取り上げたが、真名本の用字を総体的に捉えるためには実字の用字についても検討する必要性があろう。そこで、本稿では真名本に使用される類義の熟字

を取り上げ、検討することによって、それぞれの熟字の使用差を如何なる部分に求めうるのか、ということについて考察したい。

さて、中世真名本の用字法について考察する際には、その成立より前の時代の用字法をも視野に入れつつ考察をしなければならない。真名本を中世の共時態のなかに位置づけるだけでなく、歴史的にもその特質を見極めるためには通時的な考察が必要となろう。そこで、真名本の成立より前の時代たる平安時代においも使用される語を取り上げ、その時代的な展開を追うことによって真名本の性格について考察をしたい。

類義字としては、四部合戦状本・源平闘諍録・平松家本の各平家物語諸本に於いて「ここ数年」の意味で使用される「頃年」「年来」の二語と、図書寮本類聚名義抄に掲出される「比年」を合わせた計三語について、検討する。

これら三種の熟字の古辞書に於ける掲出状況としては、観智院本類聚名義抄に

頃―（年）　―（年）来同　（仏上八〇）

とあり、熟字「比年」はみられない。[1] 一方、色葉字類抄[2]には字訓「トシコロ」はみられない。但し、

年来　同（天部）ネンライ　（黒川本、畳字、中三一ウ2）

頃年　年月部カウネン　（前田本、畳字、上一〇六ウ2）

とあり、「年来」「頃年」の両熟字が字音語として掲載されている。

類聚名義抄の記述より、「頃年」「年来」が非常に近い意味を有していることが伺われる。また、類聚名義抄と色葉字類抄とでは字訓・字音の別は存するが、「頃年」「年来」の両熟字が掲載され、「比年」が掲載されていないことが知られるのである。久遠寺蔵本『本朝文粋』[3]では、「比年」「頃年」「年来」の三語が使用される。各用例数は次に記す通りである。

比年―7　頃年―7　年来―13

この内、「頃年」には、「シキリノトシ」なる訓がみられる。

○頃(シキリの)年・勅一旨開一田遍(ク)在諸国(に)。　（巻第二・20・4）

「シキリノトシ」は平家物語にその用例を見いだすことが出来、その意味は、先の「比年」「年来」と類義と認められよう。

覚一本平家物語[4]

○頃(シキリノトシ)年より以来(コノカタ)、平氏王皇蔑如(ベツジョ)して、政道(セイダウ)にはばかる事なし　（巻第五93・1）

これらの事実を踏まえ、「比年」「頃年」「年来」が互いに類義であることが認められるならば[5]、その用字の差をいかなる部分に見いだすことができるのであろうか。諸文献について、使用状況を検討して行くこととする。

二、「比年」「頃年」「年来」の出現状況について

漢字文、漢字片仮名交り文、平仮名漢字交り文の三種について三熟字の使用状況を調査した。以下、資料の分類に従い検討する。なお、平安時代以前の上代文献についても調査を行ったが、用例を見出し得なかったので省略する[6]。

1 漢字文

文書（平安遺文）[7]には「比年」2例、「頃年」28例、「年来」330例存する。これらを平安時代の時代区分（前中後期の三分）に従って分類すると、次の表の如くになる。

比年

○無相伝庄厳之人、然間郷中比年旱魃病患已以無絶、仍住人等祈禱之処、去治安三年六月五日御託宣云、

	前期（延喜前）184状	中期（延喜以降長保前）329状	後期（長保以降）4586状
比年	1（0・00五四）	0（0・0000）	1（0・0001）
頃年	14（0・0七六一）	4（0・0一三）	10（0・00一三）
年来	1（0・00五四）	21（0・0六三八）	308（0・0六七三）

注、検索対象資料としては、平安遺文中の補1以降の文書を除く。

○依旧脩行者、府依符旨、比年奉行、然今道証解任但去、仍令其替講師勤覚遵行其法、（一〇八三　太政官牒○石清水田中家文書）

頃年

○伏願、私度沙弥法教并道俗知識等、頃年之間、構造法堂僧房・太衆湯屋、種種所修功徳、（四九〇〇　大宰府牒案○堂本四郎氏所蔵文書）

○件浪人元是寺家：庄所管也、以此成農業、而頃年被寄院庄、毎事不□（二〇　多度神宮寺伽藍縁起資財帳○村山龍平氏所蔵文書）（六八　某家政所告状案○内閣文庫所蔵文書）

年来

○有千戸之封、諸国申損状、年来之所納只二百七十戸也、（二四二　伊勢太神宮司解案○東寺文書〈甲〉）

○而郡司刀禰等任図帳、領掌各戸田、年来之間、以陵戸坪坪、号未沽田、（二八三　醍醐寺牒案○三宝院文書）

用例数からは、「年来」が相当数平安時代後期に使用されていることが知られるが、各時期によって言語量にかなり開きが見られることから、各々の項目毎に文書一通当たりの各語の出現期待値を算出した。それが丸括弧内の数字である。

それによると、「比年」は各時期を通じて殆ど使用されない状況に対して、「頃年」は前期から中期・後期へと時代が降るにつれて期待値が低くなって行く。その逆に、「年来」は前期から中期・後期へと降るに従い、期待値が高くなっている。

所謂変体漢文[8]（古記録を除く）については、「頃年」「年来」の二語を使用する資料は、『高山寺本古往来』『法華験記』の二資料、「頃年」のみを使用する資料は『将門記』『日本往生極楽記』『和泉往来』、「年来」のみを使用する資料は、『雲州往来』『高野山往生伝』である。[9] 各々の用例を記す。

頃年

○頃年所構兵革其勢殊自常便以八月六日囲来於常陸下総両国之堺子飼之渡也（将門記105）

○始雖奏虚言終依実事叙従五位下掾貞盛頃年雖歴合戦未定勝負（将門記518）

○頃年（左、トシコロ）无言語行法徒以逝去（日本往生極楽記二三オ7）

○頃　年洗竇女久忍夏穢定有罪報（日本往生極楽記五〇オ4）

○而頃年（コロトシ）之間拝除（タハイチヨヲ）如（シ）忘（ワスル、カリウセキタリ）流跡似（タヘタルニ）絶（和泉往来18）

○而（ル）ヲ、頃（トシコロ）一年ハ因縁ニ相就（ツ）イテ外土（ト）ニ経（ケイ）一廻（クイ）（シテ）ノ適（タマタマケイ）京都ニ還テ（高山寺本古往来44）

○頓首謹言、頃年（トシコロ）（ノ）［之］際、指事無（キ）ニ依（テ）久（シク）申承ラ不、（高山寺本古往来184）

○頃年受持妙法蓮華経。何忽棄捨持最勝王経哉。（大日本国法華経験記48・6）

○答曰。頃年貧道孤独之身。今開栄花。亦預官爵。（大日本国法華経験記49・10）

○頃年為魔被援（マヽ）乱。棄捨一乗。執著邪見。（大日本国法華経験記62・5）

年来

○抑、年来学問ノ［之］志、心肝ヲ切ルト雖（モ）師縁（ニ）遇ヒ難（ク）シテ（高山寺本古往来2）
○年来祈誓（ノ）［之］誠（マコト）、何ソ其ノ感応无ラム哉（高山寺本古往来296）
○比丘問云。年来供養誰所弁。老僧答曰。是法華聖以慈悲心憐愍汝。（大日本国法華経験記17・11）
○老僧答曰。是汝年来所読大乗也。始於大嶽至于水飲所積置経。（大日本国法華経験記19・6）
○其所以者。年来運志。供養法華持経者。（大日本国法華経験記32・4）
○経得上人。当山持明院内。年来所居住也。建小堂於彼処。修恵業於其中。人号之小房聖。（高野山往生伝698・下・7）
○定仁上人。年来為金堂預。堂裏洒掃。仏前供養。甚厳重也。（高野山往生伝702・上・11）

説話・軍記の類の変体漢文では「頃年」「年来」が使用され、「比年」は使用されない。本朝文粋では三熟字ともに使用されたことから勘案すれば、「比年」を使用しないということは、この類の変体漢文の用字上の特徴であると言えよう。訓読法としては、「頃年」に『高山寺本古往来』『日本往生極楽記』に於いてそれぞれ「トシコロ」と付訓がみえる。「年来」については、付訓が存しないので、不詳である。

古記録[10]として、『貞信公記』『九暦』『御堂関白記』『後二条師通記』を調査対象としたところ、「比年」「頃年」各一例に止まり、「年来」が主に使用されることがわかった。各用例を掲げる。

比年

○親王諸王諸臣百官人等天下公民衆聞食と宣、比年国家衰弊（多礼波）、（後二条師通記・寛治七年二月二二日別記）

頃年

○大弁云、頃年有不蒙処分、任例勧盃（九暦・天慶八年八月一四日）

年来

○暫候参内帰宅、随身行久従者仕年来之間逃去已了、（後二条師通記・寛治七年五月二九日）
○無他行、勧学院宿人年来之間、検非違使貞度兵士所宿候也、（後二条師通記・康和元年二月七日）
○功勤公之輩也、今臣年来纏病痾、無由出仕、（九暦・天暦三年一月二一日）
○殿大饗年来四日也、（九暦・天慶七年一月一〇日）
○今日初行内弁事、年来日記召刀祢者、（貞信公記・延喜一二年九月九日）
○臣等来云、年来儒後・故人隔年挙任（貞信公記・天慶一年三月一四日）
○被仰雑事次、僧事年来之際不快、就中阿闍梨任者、真言必可練習（御堂関白記・寛弘元年三月九日）
○此暁高雅出家云々、年来無他心相従者、今有事、（御堂関白記・寛弘六年八月二八日）

この内、『後二条師道記』における「比年」の用例は宣命体で表記されている、引用文である。従って、この用例について古記録の用例としては例外であると認められるならば、古記録では「年来」を使用するものと考えてよいであろう。

2 漢字片仮名交り文

漢字片仮名交り文[11]については、『法華百座聞書抄』『三教指帰注[12]』『打聞集』『宝物集』『延慶本平家物語』を検索したが、「年来」のみで「比年」「頃年」は使用されていない。

○今、内親王天下、信心ヲコラシオハシマシテ、年来ノアヒタ御テツカラモカキタテマツラセタマヒ（法華百座聞書抄オ27）

○年シ来コ（ママ）此ノ経ノ一偈一句ヲミタテマツラス。（法華百座聞書抄オ196）

○其経、年シ来ロ、風雨ノタメニ、クチウセタリトイヘトモ、ワツカニ一巻ノコレリ。（法華百座聞書抄ウ253）

○年シ来ロワスレタリツル経フクロ、モノノカミヨリ、モトメイタセルニ、現ニ一巻クチノコレリ。（法華百座聞書抄ウ257）

○時ニ年来妻女イハク「由無キアルキシテ恥ヲイタイテカヘル」ト云フ、（三教指帰注7ウ1）

○時ニ妻メ答（ヘ）テ云（ハ）ク「年来子ホシクシテ此ノ子ヲ儲（ケ）タリ、（三教指帰注37オ1）

○母年来笋ヲ好ム、然（ル）ニ師馳ニ母親笋ヲ好フ事アリ（三教指帰注38オ3）

○サレバ、隨テ中カ吉ルベキナリ」年来イドミツル心永失ヌ。（打聞集135）

○其寺ノ僧ト成テ年来住。其寺鐘付人、此ノゴロ夜々鬼来取食。（打聞集242）

○答云々。「年来、如是念仏ヨリ外ニスル事无。死時必告申ヘシ。（打聞集423）

○伊勢御息所カムスメナカツキカ（ナカツカサノ誤カ）年来ミヤツカヒシツキタリシカハ（宝物集15ウ6）

○コノコロノ賀茂神主重保年来建春門院ニマイリツカマツリケルカマイリテミケルニ（宝物集27オ13）

「年来」の読みについては、『法華百座聞書抄』の用例として「年シ来ロ」が2例みられ、それらについては「トシコロ」と考えて良いであろう。それ以外の用例については、先に黒川本色葉字類抄を挙げた如く「ネンライ」の可能性も考えられ、何れを決し難い。

3 漢字平仮名交り文

漢字平仮名交り文、所謂和文資料[13]としては『源氏物語』『栄花物語』を検索の対象資料とした。その結果、「コロ」に相当する漢字として「比」を使用する。『源氏物語』では、「トシコロ」全281例[14]中、「年ころ」「とし比」「年比」「としころ」の四種存し、それぞれの用例数と割合は次の如くなる。

源氏物語における「トシコロ」の表記

用例	用例数	割合
年ころ	23	八・一九％
とし比	22	七・八三％
年比	10	三・五六％
としころ	226	八〇・四三％
合計	281	一〇〇％

『栄花物語』についても、「とし比」と「年比」とを指摘できる。『源氏物語』『栄花物語』の各用例を次に記す。

とし比

○あやしうとし比はいとしもあらぬ御心さしを院なとゐたちての給はせ（源氏三一〇9）

○すみもてきたらむ人の心ちするもいとおかしくてとし比あはれとおもひきこえつるはかたはしにもあらさりけり（源氏三二二9）

○とし比つかはせ給ひけるうしかひわらはに此牛はわかかた見に見よとて給へは（栄花五8・12）

年比

○年比うれしくおもた、しきついてにてたちより給し物をか、る御せうそこにてみたてまつる返々つれなきいのちにも侍かな（源氏一四1）

○年比夢の内にもみたてまつらてこひしうおほつかなき御さまをほのかなれとさたかにみたてまつりつるのみ面かけにおほえ給て（源氏四四六2）

○年比天へんなとして兵乱なとうらなひ申つるはこのことにこそ有けれと（栄花五1・19）

○殿の内に年比曹司して候つる人々とありともかかりとも君のならせ給はんままにこそはと（栄花五2・3）

○只今此御方をは御ひめ宮をかしつきする奉らせ給へらむようにそ御覧せられける年比の御目うつりたとしへ（栄花六3・16）

「年比」は、中国文献[15]や『本朝文粋』、そして平安遺文において二例みられた「比年」との関わりで使用されているのであろうか。和文の場合は他の資料と異なり、基本的に和語を表記したものである。従って、「年比」は「ネンヒ」ではなく「トシゴロ」を漢字表記したものであろう。和文に於いては、「ここ数年来」という概念を文字化する際に、数種存する漢字表記から選択するのではなく、「トシゴロ」の「トシ」「ゴロ」のそれぞれに最も密接な関係が認められる漢字を使用するようである。例えば、「チカゴロ」などの「ーゴロ」との連関で使用されているものと考える。

より検索対象を拡充することによって和文の用字と変体漢文、和漢混淆文との用字法の差が鮮明になるであろうが、今後の課題としたい。

以上を表にすると次の如くになる。

先に平安遺文で見たとおり、時代が下がって行くに従い「比年」「頃年」の用例数に減少の傾向が見られたが、それは

	資料名	比年	頃年	年来	年比	備考
漢字文	平安遺文	2	28	330		
	本朝文粋	7	7	13		
	将門記		3			
	高山本古往来		2	4		
	和泉往来		1			
	雲州往来			5		
	法華験記		10	14		
	高野山往生伝			2		
	日本往生極楽記		2			
	貞信公記			5		
	九暦		1	1		
	御堂関白記			9		
	後二条師通記	1		2		
漢字仮名交り文	今昔物語			442		
	打聞集			3		
	法華百座			4		
	三教指帰注			3		
	宝物集			2		
	延慶本平家			75	7	
	栄花物語				3	「とし比」1
	源氏物語				10	「とし比」22

注・ここに掲げた資料には本稿本文中に用例を示していないものも含まれている。

文章の種類によっても異なるようで、説話や軍記の類の変体漢文では「頃年」「年来」を使用し、古記録では「年来」を主に使用するようである。漢字片仮名交り文では「年来」のみであるのに対して、漢字平仮名交り文では「コロ」表記として「比」を使用する。

所謂和漢混淆文に属する表記は、この表でいえば漢字片仮名交り文に分類されているのであるが、中世の真名本の多くは和漢混淆文をその祖本とする。例えば熱田本平家物語は覚一本系統の本文を有するとされ、またその他の四部合戦状本や平松家本などについても同様であると考えられる。妙本寺本を始めとする真名本曽我物語においても別に仮名本が存する。文章の内容的価値からいえば、和漢混淆文として捉えるべきである。しかし、表記の上で漢字専用と仮名交じりという差が存し、そこに用字上の差が認められるか否かが真名本の用字法上の問題となる。

そこで、次に平家物語・曽我物語の各真名本を取り上げ、真名本の用字法について検討する。

三、中世往来物・真名本における「比年」「頃年」「年来」

中世の漢字表記文献について検討する前に、古辞書（節用集）[16]の記述から概観をしておきたい。

年来（コロ）（易林44・6）　頃年（トシコロ）（伊京16・7）　―（ネン）（年）来（ライ）（易林108・3）

節用集には、右に記した如く「トシゴロ」に対して「年来」「頃年」を掲出するのみで、語としての「ネンライ」は掲出されない。当然のことながら、掲出されていないからその語が存しないということではない。

1中世往来物における「比年」「年来」「頃年」

中世往来物資料[17]としては、次表の資料に就いて調査した。それぞれの用例数は次表に記すとおりである。

資料名＼語	比年	頃年	年来	年比
雑筆往来			1	
山密往来				
東山往来			2	
庭訓往来				
鎌倉往来			1	
十二月往来		1		
蒙求臂鷹往来		1		

頃年

○讃衆内古寺僧（供僧・借住）召加（シヘル）之條。項年（キヤウノ）之通式也。（『十二月往来』三二五・六）

○頃年作法餘勘略漏（リニ）レ法（ヲ）（『蒙求臂鷹往来』三六二・三）

中世往来物には用例自体が少ないので、比較の対象足りうるか否かが問題となるのであるが、「年来」と共に「頃年」をも使用することから、往来物資料にあっては古来漢字表記文での用字が継承されていると見られる。

2 中世真名本における「比年」「頃年」「年来」

中世真名本[18]における「比年」「頃年」「年来」の使用状況は、次表のとおりである。

真名本の出現状況は、中世往来物と同様「年来」に使用の偏りが見られる。

資料名＼語	比年	頃年	年来	年比
曽我物語			36	
神道集			6	
四部合戦状本平家物語		3	22	
源平闘諍録		2	5	
平松家本平家物語		6	5	
真名本方丈記				
大塔物語			1	

「頃年」は四部合戦状本に3例、源平闘諍録に2例、また平松家本では6例が確認できる。各用例を次に掲げる。

○被院宣称（イラク）従頃年以来平家栄如皇（ク）—花無憚（シ）政—道破—滅（シ）仏法欲レ傾（ケン）（四部本上一八三左2）

○頃年（ヤウ）間有平相國云者管領（シ）四海令悩—乱（ヌ）万—民（四部本上二八九右5）

○爰有（下）六—条（トテ）頃—年奉レ続（少将）女—房臥—辺嘔—叫（テ）嗷—々申者（ルハ）悲—哉（ヤ）（源平闘諍録82・14）

○朱雀南行顧二大内山一多三思—食出事—共遺—過鳥羽殿頃—年頃—日奉三見—馴舎—人牛—飼共遙奉見—送（源平闘諍録88・2）

○頃年（ケイ）以降（ヨリコノカタ）入道前（ノ）大政大臣平清盛（ホシイマヽニイ）恣失二王法一乱二朝政（ヲ）一（平松家本四、二一ウ1）

○右自二頃年一以奉平氏蔑（ヘツ）二如（ショシテ）皇家（ヲ）一無レ憚（ハヽカリ）二政道（ヲ）一破二滅（シテ）仏法（ヲ）一欲レ亡二朝威（ヲ）一（平松家本五、二八オ8）

「頃年」は、四部合戦状本では3例存するが、その内2例が文書の用例である。また、平松家本6例のうち二例が同じく文書の用例である。その用例は決して多くはないが、前代の軍記物語（将門記）にも見られたのと同様、文書に多く使用される「頃年」を使用し、漢文的な表現をとる、内容的側面に、表記上の性格の違いを捨象する、共通点が存するように思われる。また、「頃年」は仮名本にも出現しており、それらとの関係も考慮に入れておくべきであろう。特に、平松家本は語り本系の真名本とされ、仮名本の用字との接点が考えられるのである。従って、斯様な用例を除外すれば、真名本においても「年来」を主に使用するということができるであろう。

中世往来物・真名本においては、「比年」「頃年」「年来」の内、主に「年来」を使用する。このことは、前代の使用状況と比較すると、必ずしも正格漢文的な語の多様性を志向しない、古記録や漢字片仮名交り文の用字に通じるのである。往来物については、資料的な性格を一にする高山寺本古往来・雲州往来と比較すると、時代が降るに従い「年来」へと集約されていくとみられるのである。真名本についても中世の往来物と同様、「年来」を使用する。これは、軍記物語という内容的価値に支えられた用字というよりも、文飾を施さない古記録や漢字片仮名交り文の類に通ずる用字であると考える。尤も、平家物語は先行形態として漢字仮名交り文が存し、その用字を踏襲したのであるとすると、将に真名本の用字は前代に通じるものである。

四、おわりに

ここまで検討してきたことを纏めると以下のようである。将門記・法華験記・高山寺本古往来に「頃年」が使用される一方で、それ以外の漢字文・漢字仮名交り文では「年来」が用いられている。これは、漢文を作成する際に意識的に多様な文字を使用する傾向と、仮名交り文のような文字の多様性を必要としない表現行為との差であろうと考える。また、同じ仮名交り文であっても漢字片仮名交り文と平仮名交り文とでは、その性格を異にする可能性がみられた。

中世真名本に於いては、「頃年」を使用する文献は平家物語に限られ、それら以外の文献では「年来」が使用される。つまり、基本的には漢字片仮名交り文の用字を踏襲しているものと認められるが、その一方で各作品毎の表現法を反映した用字も存する。

山田俊雄氏は、真名本の表記様式について、次のように述べている。

平家物語覚一別本は、仮名漢字交りの本文であらうと、真名の本文であらうと、言語作品としての同一性は確乎として保持されてゐる。文字様式のいれかへが、文章のスタイルに影響があると考へるならば、文体といつてすべてをふくめてよいであらうが、変体漢文と、和漢混淆文とを併列対峙させるやうな分類は、やはり現実的ではないやうに思はれる。（「真名本の意義」『国語と国文学』昭和三二・一〇）

文体を支える一つの要素として用字が挙げられるとすれば、漢字仮名交り文で使用頻度の高い「年来」をそのまま継承して使用しているところから、表記様式の差を捨象した文体上の共通性を見出すことが出来よう。しかし、このことは三種の熟字を取り上げて検討したに過ぎない。今後は更に検討項目を増やし、真名本と他の変体漢文との用字上の共通性と差異性についての検討を要する。

注

（1）図書寮本類聚名義抄には「一（比）年」が掲出されている（134・4）が、字訓・注は存しない。『図書寮本類聚名義抄』（勉誠社、昭和五一・一一・二五）による。

（2）『色葉字類抄研究並びに索引』中田祝夫・峰岸明編、風間書房、昭三九・六・三〇

（3）『身延山久遠寺蔵重要文化財本朝文粋』身延山久遠寺編、汲古書院、昭和五五・九

（4）『高野本平家物語』市古貞次編、笠間影印叢刊五四、昭和四八・一二・二〇

(5) 『漢語大詞典』（漢語大詞典編輯委員会・漢語大詞典編纂処編纂、上海辞書出版社）によれば、各々「【比年】①毎年、連年。②近年。」「【頃年】①近年。②往年。」「【年来】①近年以来或一年以来。②年才到来。」（各用例略）とあり、意味上の差異が認められるようである。が、本邦の文献に於いて同様の差異を指摘することは困難である。

(6) 古事記、日本書紀に「比年」「頃年」「年来」の用例なし。本朝麗藻（『校本　本朝麗藻　附索引』大曽根章介・佐伯雅子編、一九九二・一二・一、汲古書院）には次の用例がみえるが、いずれも意味が若干異なる。「比年」「頃年」は無し。

・東都春月秋風夜　四五年来分付誰（詩140）

・七八年来、洛陽才子之論詩人者、謂三人為先鳴（序152）

菅家文草・菅家後集（『菅家文草・菅家後集詩句総索引』川口久雄・若林力編、明治書院、昭五三・九・一〇）、文華秀麗集（『文華秀麗集索引』芳賀紀雄編、和泉書院、昭六三・一〇・一〇）にも「比年」「頃年」「年来」のいずれも無し。

(7) 検索は、CD-ROM版『平安遺文』（東京大学史料編纂所編、東京堂）による。

(8) 検索資料は以下の通り。『高山寺本古往来・表白集』（高山寺典籍文書綜合調査団、東京大学出版会、昭四七・三・三一）、『大日本国法華経験記　校本・索引と研究』（藤井俊博編著、和泉書院、平八・二・二八）、『将門記』勉誠社文庫131（中田祝夫解説、勉誠社、昭六〇・六・二五）、『日本往生極楽記』（天理善本叢書所収天理図書館本による。検索には宇都宮啓吾「天理大学附属天理図書館蔵『日本往生極楽記』漢字索引稿」（『鎌倉時代語研究』第十六輯、武蔵野書院、平成五・五・三十）を利用）、『和泉往来　高野山西南院蔵』京都大学国語国文資料叢書（佐竹昭広編、臨川書店、昭五六・一二・一五）、『雲州往来享禄本　研究と総索引』（三保忠夫・三保サト子編、和泉書院、昭五七・三・一一）『高野山往生伝』（岩波日本思想体系所収本による）

(9) 変体漢文資料としては、他に『南無阿弥陀仏作善集』（東辻保和「南無阿弥陀仏作善集について」訓点語と訓点資料38）についても検索したが、「比年」「年来」「年頃」の用例は見出せなかった。

(10) 検索資料は以下の通り。『陽明文庫蔵本御堂関白記自筆本総索引』（峰岸明偏、平七・六・八、汲古書院）、『貞信公記』『九暦』『後二条師通記』（大日本古記録）

(11) 検索資料は以下の通り。『法華百座聞書抄総索引』（小林芳規編、昭五〇・三・三一、武蔵野書院）、『中山法華経寺蔵本三教

指帰注総索引及び研究』（築島裕・小林芳規編、昭五五・八・一五、武蔵野書院）、『打聞集の研究と総索引』（東辻保和著、昭五六・一・一五、清文堂）、『宮内庁書陵部蔵本宝物集総索引』（月本直子・月本雅幸編、平五・一〇・三〇、汲古書院）、『延慶本平家物語索引篇』（北原保雄・小川栄一編、平成八・二・二五、勉誠社）。他、『今昔物語集』（岩波旧大系本）についても検索をしたが、四四二例全て漢字表記であった

(12) 三教指帰本文の影響関係については、次の用例「頃日」が見られるのみである。

・但頃日間。適遇良師之数。既醒前生之酔。（巻中、161・10）

本用例に対応する三教指帰注本文は見当らない。

(13) 検索資料は、以下の通り。『源氏物語大成』普及版（池田亀鑑編著、昭六〇・一〇・二〇～昭六一・八・二〇（本文篇・索引篇）、中央公論社）、『栄花物語本文と索引』（高知大学人文学部国語史研究会、昭六一、武蔵野書院）

(14) 『源氏物語大成』では「としころ」282例掲出するが、一例誤りが存し、正確には281例である。

(15) 「比年」「頃年」「年来」の三種の熟字について『佩文韻府』『五経索引』を検索した結果、「比年」の用例を得ることが出来た。用例を掲げる（『佩文韻府』『五教索引』には「頃年」「年来」なし）。注3文献によれば、三種共に使用される。

○連師比年簡車卒正三年簡徒群牧五載大簡車徒（漢書刑法史）

○比年三見之常若有所適（蘇軾詩）

○比年入学中年考校。（礼記18・4・1）

○故天子制諸侯、比年小聘、三年大聘。（礼48・6・1）

(16) 『古本節用集六種研究並びに総合索引』中田祝夫著、昭四三・四・一五、風間書房

(17) 検索資料は、以下の通り。『日本教科書大系往来篇第1巻　古往来一』（石川謙編、講談社、昭四三・一・二〇）『日本教科書大系往来篇第2巻　古往来二』（石川謙編、講談社、昭四二・五・二五）

(18) 検索資料は、以下の通り。『真名本曽我物語』（山岸徳平・中田祝夫解説、勉誠社、昭四九・一〇・二〇）、『神道大系　文学篇一　神道集』（神道大系編纂会編、昭六三・二・二九）、『四部合戦状本平家物語』（慶應義塾大学附属研究所斯道文庫編、汲古書院、昭四一・三・二五）、『源平闘諍録と研究』（山下宏明編、未刊国文資料刊行会、昭和三八・三・一）、『平松家本平家

物語』（京都大学文学部国語学国文学研究室編、清文堂、昭六三・五・一〇）、『真字本方丈記　影印・注釈・研究』（島津忠夫監修、田賀元子・田野村千寿子著、和泉書院、平成七・一〇・二〇）、『大塔物語』（続群書類従二一輯下）

［付記］　本稿は平成十一年度鎌倉時代語研究会夏期研究集会において発表したものに基づいて作成した。席上、また折に触れご指導賜った先生方には厚く御礼申し上げる。